2017. 3. 1

2016 年記憶に残った本と映画

1. 「ぼくらの祖国」青山繁晴著

青山繁晴氏は、昨年参議院選挙に出馬し当選された知識人である。それまでは余り存知ない方であったが参議院選挙での演説をユーチューブで拝見し、熱烈な愛国者であることを知った。演説で硫黄島（いおうとう）の歴史と現状が気になった。数年前の北朝鮮拉致被害者の蓮池薫氏の講演と同じ感動である。硫黄島の過去を知りたくてこの本に辿り着いた。凄い話だ。

硫黄島での戦闘はハリウッド映画「硫黄島からの手紙」としても映画化されている。問題はこの島に眠る２万人の日本人の遺骨だ。回収が殆どされていないという。しかもその遺骨が空港滑走路の下に眠っている。日本人の一人として「祖国」について考えさせられた。

2. 「シンゴジラ」樋口真嗣監督

題名は「新と神」の意味でのシンなのであろうか。ゴジラは日本ＳＦ映画の最高傑作の一つである。この５０年の間に日米３０近い新作が上映されてきた。スターウオーズですら７作目である。ゴジラ映画の凄さがわかる。それだけに食傷気味で公開当初は見る気がしなかったが、人気の凄さに驚いて鑑賞した。

これまでと全く異なるコンセプトに驚いた。ゴジラは動く原子力発電所のような生物である。政府機関（内閣と防衛省が中心）の緊急事態への対応が凄い。相当リアリズムに沿って描いている。福島原発事故当時もこのようであったのかと思う。監督の我が国安心安全体制への批判と皮肉が込められている。東京都直下大地震も予想されており、都心に住む多くの人々に見てもらいたいと思う。

3. 「１９９７年世界を変えた金融危機」竹森俊平著

１９９７年の金融危機を、世界と日本の経済状態と政策当局の対応を多面的に分析した傑作である。当時都内の銀行支店長であったが、銀行本部（と当局）の指導や方針には疑問を持ち続けていた。この危機は、１９８０年代の日本経済成長への欧米先進国の反発、国際金融とグローバル経済の仕組み、アジア通貨危機などが複雑に絡んでいると解説されている。

１９９７年の我が国金融政策は「金融行政の失敗」のモデルとなり、「貸はがし、貸し渋り」という言葉が流行した。多くの中小企業が倒産し、それが原因で多くの経営者が自殺した。この失敗は２００７年に発生した米国リーマンショックや欧州金融危機対応に活かされ、異次元の金融緩和を実施した。日本のような金融危機には至らなかった。

しかしこの年を転機に日本の銀行と企業との関係は大きく変更し、欧米流のクールな関係になった。なお現在の世界経済は大規模な金融緩和の下で運営されている現実を忘れてはならない。

4. 「新軍事学入門」　佐藤優編著

著者のひとりである佐藤氏は、元外務省の分析官である。ソ連崩壊をモスクワで体験し、宗教やテロや戦争に関する造詣は凄い。この本には日本を代表する軍事専門家が基本的な軍事学を提供している。昨今の世界軍事情勢を分析しつつ、我が国の防衛能力と日本憲法の制約や枠組みのなかでの取り組みを欧米先進国と比較しながら解説している。

１９５０年の朝鮮戦争が、「防衛範囲を対馬列島までにする」との米国政府高官発言が北朝鮮の暴発を誘発したという歴史的な事実がある。武力の空白が戦争を招くことは歴史的現実である。ウクライナ、シリア、イラクでの戦争も国際政治の現実である。「アメリカは世界の警察官をやめた」とオバマ大統領が２０１３年に発言したが、２０１４年のウクライナと南シナ海でのロシアと中国の侵犯を招いたように思う。外交と安保を理解する上で参考になった。

5. 「住友銀行秘史」　國重淳史著

1990 年のイトマン事件を、磯田頭取他 100 名近い住友銀行の役員幹部と反社会的勢力（ヤクザ）との戦いを活写したノンフィクションである。ほぼ全て登場人物が実名なので現存する方々の名誉棄損問題が絡む。従って著者の勇気は相応なものである。國重氏は大塚氏（元日経新聞記者）との対談（文芸春秋 １２月号）で、事件を風化してはならないという思いを述べている。あれから２７年経った今日も大組織に働く者の本質は変わっていないのではないか。

この本から学んだことは、日本を代表する大銀行といえでも内紛があると反社会勢力に付け込まれ莫大な損害を被る、ということである。新田次郎著の「風林火山」という傑作小説があるが、これは現代版の戦国絵巻なのかもしれない。

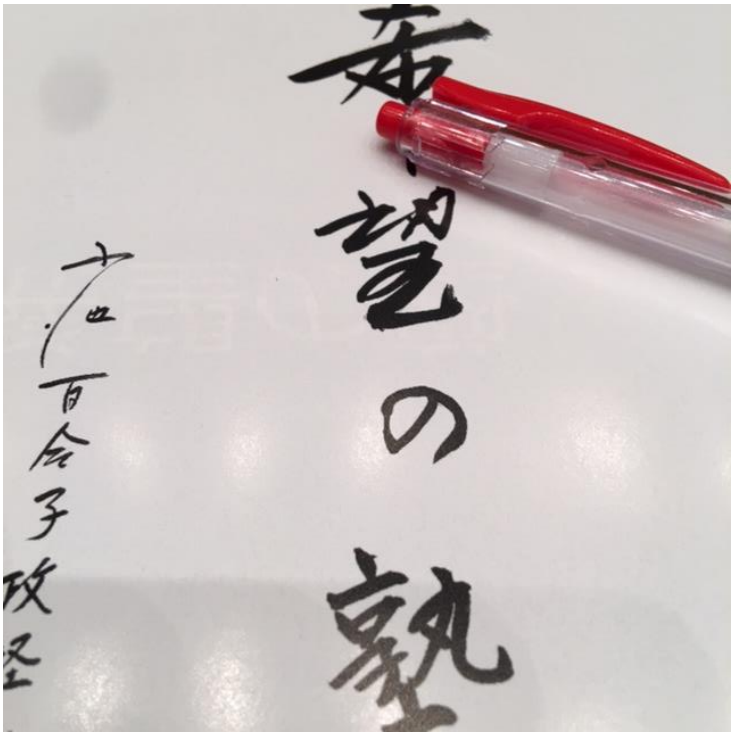
６．　「レッドセル　ＣＩＡ特別分析官」　マーク・ヘンショー著　横山啓明著

この本は 2014 年に購入して本棚に置いてあった。トランプ大統領誕生で米中関係が緊張してきたので、このスパイ小説を取り出して読みだした。はじめから最後までじっくり読んだ。駐米大使と中国共産党主席との対話が凄い。またインテリジェンス〈スパイ〉活動の最前線情報が満載だ。

2 月にクアラルンプール空港で北朝鮮要人が殺害されたが「さもありなん」と感じた。平和の裏側には冷酷な国際政治や謀略が渦巻いている。米国では既にベストセラーとなっている。

７．　「女子の本懐」　小池百合子著

小池氏は、１９歳でエジプトに留学してニュースキャスターから政治家になった。この本は２００７年７月４日の防衛大臣就任から退任までの５５日間の日記だ。都知事就任で昨年夏から小池ブームだが、氏の生い立ちから思想・哲学・知見が満載だ。保育所問題に関しての見識も披露されており、女子の本懐は「出産と育児」だと記述している。改めて小池百合子氏の経験と識見に感動した。

昨年１０月から始まった小池百合子政経塾「希望の塾」に参加している。第１期塾生として様々な識者の話を聴講しているが、小池塾長の講義は毎回大変素晴らしく刺激を頂いている。

左の写真は希望の塾の講義の模様で、下の写真はその講義資料の表紙だ。